

「デジタルヒューマニティーズと図書館の役割 -- リソースを巡るクロストーク」

Makoto Goto (National Museum of Japanese History)

Nobutake Kamiya (University of Zurich)

Naomi Yabe Magnussen (University of Oslo)

Masashi Tanaka (NetAdvance)

Toshinori Egami (International Research Center for Japanese Studies)

●ヨーロッパにおけるデジタルヒューマニティーズの現状

○神谷:

DHIに関して図書館の役割として、

- 研究データ管理
- データリテラシー

の2点が挙げられると思う。

(スイスからみると)ドイツでは研究データ管理のためのインフラ整備が活発で、国レベルでインフラ(NFDIなど)が整備されている。スイスはこれから、という感じ。

図書館員が研究者とデータ提供者の間をとりもって、デジタル・リソースを仲介する必要が出てくる。

それにともない、データリテラシー(データを取り扱うスキル、法的倫理的問題など)をどうやって研究者と共有してゆくのか、という課題が発生するのでは。

○矢部:

一部やっている人がやっているという状態。ただし、組織や国を超えたワークショップやセミナーなどは、関係者の間では大変活発。

活動、プロジェクトは点で存在している状態で、全体的に足並みのそろった進み方をしているわけではない。

各大学で対応が異なっているが、当大学では現時点で全てのDH関係の活動を全体に網羅して把握している状態とは言えない。オスロ大学では図書館をDHのHubの役割にあてることになったが、仕事はこれから。

人文学はこれまでは一人の研究者が自分のテーマを深めるという姿勢が強かったが、DHIはひとりではなくグループでの研究活動が必要。人文学専門家と情報学専門家が一緒に仕事をする必要がある。若手の研究者の方がこういったことに興味を示しているので、若手、学生にターゲットをさだめる方針。

○後藤:

日本も同じような状況では。

科研費でデータベースが作られることが多くあるが、それをうまく見つけられない等の状況はいまだに残っている。

研究者側でも探せないのも、図書館のようなデータの所在や状況を把握している存在と連携していくのが重要だろう。

●日本からのリソース提供

○田中:

コロナ禍でお客様と接する機会がなく、情報の入手、ニーズや課題の把握がしづらい。EAJRSのような場が重要だった。

特に学術系の出版は紙媒体の売上がシュリンクしていると聞く。だが一方で、デジタルへの動きも出てきている。デジタル・オリエンテッド、紙不要などの企画についての話なども聞く。

→ゆまに書房・河上：電子書籍タイトルを増やす、紙と同時刊行など。他社も同傾向。ざっさくプラスとの連携のような電子ならではの機能も。

→○大修館・山口：教科書の紙をやめる動きや、学習のビッグデータの動き等があるようだが。

○後藤

JDCat <https://jdcats.jp/>（データセット／データリポジトリを探す目録）

データセットをダウンロード・解析して研究に活用する、という動きが日本でも起こり始めている。

人間が1件ずつ見るデジタルアーカイブだけでなく、データセットが重要。

データセットの議論などは、人文系では少し前は難しかった。しかし、1-2年でも大きく進歩しているので、今後2-3年で、データ活用による人文研究がさらに進むのではないかと期待こみで言っておきたい。

○矢部：

新聞データベースでテキストマイニングができるようになってほしい。

→田中：研究者側からは使い方が多様なのでテキストがほしいと言われる、版元側としては提供が難しいと言われる。小学館では日本古典文学全集のデータを国立国語研究所に提供してコーパスで使えるようになっている例がある。

→矢部：プロジェクトとして研究者・学生とベンダーと共同で実証実験などができないか。出版者側にも必要性を知ってもらえる機会が得られれば。外部資金の申請もプロジェクトとして可能性があるだろうか？

→読売新聞社・宮田：データ販売ではなくデータベースか。

→矢部：データベースで検索してどれが必要かを見る必要がある。

○神谷：

EAJRSでも今後さらに”DH&図書館”というテーマにフォーカスしてゆけるとよいなあ。

また、研究データを国内外の研究者が協働作成出来るような機会も増えると思うので、そうした国際協力ができる下地とか、情報共有とか、そのサポートができるようになれるとよいとおもう。

●まとめ

○後藤：

「総合知」の創出・活用に向けた人文学・社会科学振興の取組方針

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/048/houkoku/1421958_00002.htm

https://www.mext.go.jp/content/20210827-mxt_kouhou02-000010167_11.pdf

日本ではデータ提供は研究者が業務としてやることも多い。人文学、日本研究を推進する上でも人文系の研究者単独ではなくいかにしてチーム（図書館・情報技術者含めた）を作っていくかが今後には重要。事前の打ち合わせで矢部さんから「図書館は知のハブ」と言われたが、データを作る側と図書館の連携、使う側と図書館の連携が必要になる。図書館（の中の人々）もチームを作る際の重要なプレーヤーとしても期待したい

○田中：

データ発信が増えるにしたいが見つけづらくもなる。なので、EAJRSのような情報交換の場、議論の場をもっと持つことが必要。

○矢部：

知のハブとしての図書館。新たな人文学の方法論が必要か。他の分野の人との協力の垣根が低まる必要がある。

○神谷：

有料コンテンツなどの利用契約・規約は図書館側が持っていると思うので、そういった知識を研究者と共有し、また研究者からのフィードバックをベンダーさんに流せるようにしたい。